

ヘブル語語彙研究に対するウガリト学の貢献について

—Ugaritic Contributions to Hebrew Lexicography—

津村俊夫

セム語学の分野でウガリト語研究が、1929年におけるその諸粘土板の最初の発掘・出版以来、過去45年間ヘブル語学及び旧約聖書学に対し多大なる貢献をして来たことは周知の事実である。¹そして、旧約聖書の文献的性格の正しい認識のために、現在ウガリト語を含む比較セム語学の重要性が大いに注目されている。そして歴史言語学における比較の方法 (Comparative method) が、ヘブル語のより初期の歴史を知る上で不可欠のものであることは言うまでもない。²しかし、カナン語の一方言であるところのヘブル語と、ウガリト語との言語的関係の把握のためには、北西セム語全体のうちにそれらの言語を「系統的に」正しく位置付ける必要がある。最近では、ウガリト語をカナン語の一つと考える立場³よりも、むしろ独立した北西セム語族の一つと見なす方が有力になりつつある。⁴従って、北西セム語に属するウガリト語とヘブル語との相関関係を正しく把握するために、Barrが指摘するように、比較言語学 (Comparative Philology) の方法が “sympathetic but also critical”⁵ に適用されなければならない。

ヘブル語語彙研究にとって、その同族諸言語 (cognate languages) よりの諸情報は、語義のより正確な理解のための “principal basis”⁶ であるが、なかでもウガリト語及び北西セム諸語が過去半世紀にわたって最重要な情報を提供して来ている。しかも、昨年末以来、ウガリトの北東のアレッポの南50キロ (現在のTel-Mardikh) で発掘されている Ebla 文献——約15,000の粘土板——の多くが北西セム系の言語で書かれているであろうことは、その地理的・文化的背景より察してほぼ確実であるので、今後の北西セム語学の飛躍的發展が待たれている現状である。しかし、ウガリト語語彙研究自体の現況を概観する時、我々は、“sympathetic but also critical” な態度が不可欠であると言わなければならない。最近の J. C. de Moor の分析によれば、既出の総合的なウ

ガリト語語彙集であるところの C.H. Gordon, *UT* (1965), G.R. Driver, *CML* (1956), J. Aistleitner, *MKT* (1963) の各々のうち、ウガリト学の現況に照らしてその訳が「成功している」と思われるものの割合は、それぞれ 59% (2000 語中)、63% (1650 語中)、60% (2025 語中) であるということである。⁷ 従来の如何なる「ウガリト語語彙集」も、そのまま無批判には使用できないことを示している。⁸

セム語の語彙研究 (Lexicography) にとって、セム語独特の「語根」の概念が非常に重要であることは自明のことである。それゆえ、その音韻構造を正しく把握するためには、セム諸語の子音における音韻対応法則の理解が最重要であると言える。⁹ 本論文では、ウガリト語の音韻論的研究の成果にもとづいて、旧約聖書の 'zy wzmr̄t yh (出エジプト記。15 章 2 節) 及び n'ym zmr̄wt ysr' (サムエル下。23 章 1 節) にみられるヘブル語の語根、zmr と n'm の意味と用法の解明を試みる。

セム語の主要言語における、上記のヘブル語の二語根に関連のある子音の対応表を以下に掲げると：¹⁰

セム祖語	*d	*ḏ	*z	*t	*š	*š	*'	*g	*m	*n	*r
アラビア語	d	ḏ	z	t	s	š	'	g	m	n	r
ウガリト語	d	ḏ (ḏ)	z	t	š	š	'	g	m	n	r
エチオピア語	d	z	z	s	s	š	'	'	m	n	r
ヘブル語	d	z	z	š	š	š	'	'	m	n	r
アラム語	d	d	z	t	š	s	'	'	m	n	r
アッカド語	d	z	z	š	š	š	'	'	m	n	r

この音韻対応表によれば、ヘブル語の zmr 及び n'm に音韻的に対応するウガリト語は次のごとくとなろう。

ヘブル語	zmr	n'm
ウガリト語	① zmr ② dmr ③ ḏmr	① n'm ② nḡm



しかしながら、(表 1) の音韻法則をただ機械的に使用するのでは不充分であるし、(表 2) の対応が両言語にて現実的に確認され得るかは、ウガリト語及びヘ

ブル語文献の実情に照して批判的に究明する必要がある。

(表 1) に関して、まず第一に注目すべき点は、アラビア語の音韻 /d/ に対応するヘブル語の音韻は /z/ であるが、ウガリト語では /d/ 及び /d/ の二つの音韻が確認されていることである。セム祖語の音韻 */d/ が、ウガリト語では通常 /d/ として表われていること¹¹ は、例えば、dbḥ「犠牲」、d「~の」、dqn「ひげ」等の語が、それぞれアラビア語の ḍbh, ḍw, ḍqn に対応していることから理解される。¹² すなわち、通時的 (diachronic) に見るならば、ウガリト語に於ては、通常の場合、*/d/ > /d/ という音韻的シフト (phonological shift) が生じていることになる。他方、これに反してセム祖語の音韻 */d/ が、ウガリト語のある語にて保持されている場合があるけれども、これらの語には、ゴードンが正しくも指摘しているごとく、多くの場合その音韻的環境 (phonological environment) に r 音が存在しているという条件があるようである。¹³ 例えば、dr「腕」、'dr「援ける」、ḍmr「強い」、ḍrq “to tread”,¹⁴ ḍrt「夢」等は、それぞれヘブル語の zr', 'zr, zmr,¹⁵ (zrq?) (zry?)¹⁶ と対応している。しかしながら、この環境的条件を満たさない場合でも、音韻 /d/ を保持しているように見える例が、ḍ「~の」、ahḍ¹⁷, il ḍbb¹⁸, ḍd¹ (“mountain”)¹⁹, ḍd^{II} “breast”, ḍnt (609: 22), ḍnb, ḍbl 等にみられるが、この現象を如何に説明すべきであろうか。確かに、UT 75, 77 のように、古文体 (archaic) の綴りを一貫して採用しているテキストでは、/d/ ではなく、本来の /d/ で表記されているのであるから、ḍ (77: 45), gmd (75: I: 13), ahḍ (75: II: 33), il ḍbb 等の場合はこのような古文体的綴りであると我々は考える。

F. クロスは、これらの ḍ 綴り (grapheme) を含む語のうち、ḍd^{II} “breast”, ḍd^I “mountain”, ḍbl (地名)、ḍrt “vision” の語に含まれている grapheme ḍ の背後に、語源的 */t/ が意図されているのではないかと説明する。²⁰ たしかに、ウガリト語では、地名 ḍbl がアマルナ文書の *šabīlu* 及びヘブル語の šôbal に対応し、地名 aḍdd はヘブル語の ašdôd に対応し、且ウガリト出土のアッカド語文献にて *ašdadu*²¹ と表記されている。更に、ḍd^{II} “breast” (52: 61) は、ウガリト語の正常の綴りでは ḍd^{II} “breast” であって、後者はヘブル語の šād と音韻的に対応しているのである。しかもその上、Rainey が、ウガリト語アルファベット文字による人名 tdy (150: 18) とアッカド語音節文字による表記、¹ša-du-ia₆ 及び ¹KUR-d[u-ia₆] との比較により確認しているように、²² ウガリト語 ḍd^I はアッカド語 *šadū* (KUR) “mountain” と対応する。²³ 従って、もし ḍd^I が “mountain” という意味を有するならば、²⁴ ḍd^{II} “breast”

(=td^{II}) の場合のごとく、それはもう一つの語 td^I (KUR) “mountain” の変形 (graphic variation) であると考えることが出来よう。しかしながら、F. クロスが、dd^I // td^I “mountain” を、ヘブル語の šadday と同族語 (cognate) であると主張する点には、形態論的難点もある。²⁵ さらにまた、彼が、オールブライトに従って、drt “vision” がヘブル語の šwr “to see” と対応すると考えるのは、必ずしも正しいとは言えない。ウガリト語に於ける */d/ の保持は、いわゆる「環境同化の作業原則」に従って、/t/ をその音韻的環境に含むが故であると説明されるからである。従って、この音韻 /d/ に対応するヘブル語の音韻は、音韻法則に従って /z/ でなければならない。

にもかかわらず、上述のクロスの見解は、drt 以外の語、すなわち、(dd^I), dd^{II}, dbl 及び addd 等にみられる音韻的現象により支持されると考えてよいだろう。すなわち、ウガリト語の grapheme d () は、その本来の音韻 */d/ のみならず、*/t/ をも表わし得たのである。²⁶ しかしながら、このことは、Dahood が、クロスの見解を誤って主張するところの、ウガリト語の grapheme d が “polyphonous” (多音的) な性質をもっていて、/d/ 及び /š/ の両音韻を表記し得るという立場²⁷ を支持することではない。むしろ、grapheme d はウガリト語にて、音韻的シフト、*/t/ > /š/ がすでに始まっている状況にある時²⁷ に、無声歯間子音 [θ] がまだ [j] にシフトしていないような語の音韻 /t/ を表記するために用いられたのであると考えるべきである。従って、ウガリト語の正常の表記法とはちがう「古文的」——archaic または archaizing——または「方言的」な語の表記に於て、無声の fricative (spirant) [θ] 音を表わすために、書記が、それに最も近い有声の摩擦音 (spirant)、即ち有声歯間子音 [ð] ——それ自体は普通の用法では (音韻変化 */d/ > /d/ のプロセスが完了していたと考えられるから) 失われてしまっていた音——に対する記号 (grapheme) d () を用いたのである。²⁸ さらに、Rainey の指摘するように、²⁹ ウガリト語アルファベット表記による人名 dmr̄d (=dmr + hd) が、アッカド語音節文字表記では zi-im-rad-du 及び šī-im-rad-du の両方の形で表われているという事実は、grapheme d が二つの異なる音韻を表わした——即ち、polyphonous である——ことを示しているのではなく、異なる背景をもった書記たちによる graphic representations に他ならないのである。³⁰

以上の論述をまとめると、まずウガリト語にては、元来 grapheme “d” は音韻 /d/ を、grapheme “t” は音韻 /t/ を表記していたけれども、多くの語に於て、

音韻変化 */d/ > /d/(1)

音韻変化 */t/ > /š/(2)

というシフトが起ったと考えられる。しかしながら、(1)の音韻変化に従わない場合が存在するのは、㉑ その音韻的環境 (r 音) の故であるか、又は ㉒ 古文的スペリングのためであろう。他方、(2)の音韻変化は、(1)の音韻変化がほとんど完了していた時に、進行中であつたようで、通時的には、(1)が(2)よりも先に起つたと想定できる。すなわち、grapheme “**d**” は最早(正常の環境的条件のもとでは)音韻 /d/ を表記するものとしては機能していないで、grapheme “**t**” が音韻 /t/ を表記しえない段階(又は環境)での /t/ を表記するために用いられたのであろう。

以上の議論を踏えて、ヘブル語の語根 *zmr* に音韻的に対応すると考えられ、しかも実際に存在が確認されている4つのウガリト語の語根について考察しようと思う：

- ① *dmr^I*
- ② *dmr^{II}*
- ③ *dmr*
- ④ *zbr* (**zmr*)

① *dmr^I*:

この語根は、ウガリト・テキストで、UT 130: 9, 'nt: II: 14, 28, *et al.* で、“a class of troop”, 即ち「兵士」として表われている。Dahood は、この *dmr^I* の意味を “sentinel” / “guard” ととるが、³¹ これは、むしろアラビア語 *damîr*, “brave”, サマリア・オストラカ 12: 2-3 の *zmr*, アモリ語の *zimr* 等と同系 (cognate) の語^{31'} で、“strong” という基本的意味を有する語根である。従って、セム語における祖形は **dmr* であることは、音韻的観点より明らかである。このウガリト語語根の /d/ が、(1)の音韻変化 (**/d/ > /d/*) を受けずに、祖語の音韻のまま保持されているのは、上述のごとく、その音韻的環境に /r/ を含むから (㉑) であるか、又は古文的綴りのゆえ (㉒) であると考えられる。従って、de Moor が、ウガリト語の「正常な」(normal) 綴りでは *dmr* (“to protect” / “to watch”)³² であるのが、「方言」(dialect) では *šmr* として表われ、両者はヘブル語の *šmr* (古文的—archaic—*zmr*) “to protect” と対応すると考えようとするのには音韻論的根拠が薄い。³³ ウガリト語 *dmr^I* がヘブル語の *šmr* と cognate である為には、この語の grapheme “**d**” が、すで

に観察したところの \underline{dd}^I , \underline{dd}^{II} , \underline{dbl} , \underline{addd} の場合のように、音韻 /t/ を表記するものであると見なければならなくなり、³⁴ ウガリト語 \underline{dmr}^I の背後には、語源的 $*/\underline{tmr}/$ 、即ちウガリト語に於ける正常な語根として \underline{tmr} を想定しなければならない。他方、de Moor がヘブル語 $\underline{\text{šmr}}$ の archaic な形態であると主張するところのヘブル語の語根 \underline{zmr} は、音韻対応の法則より判断すれば、ウガリト語では $*/\underline{zmr}/$ 又は $*/\underline{dmr}/$ という語源的形態の語として存在するはずである。従って、ヘブル語の“archaic”な語根 \underline{zmr} は、ヘブル語の $\underline{\text{šmr}}$ とは、語源的には無関係であると言うことになる。それ故、ウガリト語の $\underline{\text{šmr}}^{35}$ は、de Moor が言うような \underline{dmr} の「方言的」形態ではなくて、全く独立した語根で、ヘブル語の語根 $\underline{\text{šmr}}$ と対応されるべきものであり、他方、ウガリト語の \underline{dmr} はヘブル語の語根 \underline{zmr} と互いに cognate であると言うことになる。結論的に言えば、ウガリト語 \underline{dmr}^I の意義素³⁶ が「強い」「strong」で、それゆえ、“to protect” という意味をとりうると考えられるのであって、ヘブル語の $\underline{\text{šmr}}$ “to watch, to protect” と語源的に同じであるが故にそうなのではない。R. Borger が適切にも指摘しているように、³⁷ ウガリト語の \underline{dmr}^I (= \underline{dimr} -) は、‘z, “Kraft” と並行に表われていることから、³⁸ “Stärke” という意味と考えるべきであって、“protection” (APNM, 188) 又は “Schutz” (PTU, 197) はその二次的な意味ととるのが妥当である。³⁹

② \underline{dmr}^{II} :

1968年出版の *Ugaritica V* にて、それまでに未発表のウガリト語文献が公表されたが、その一つのテキスト (602: 3-4) に新しい語 \underline{dmr}^{II} “to play (music)” が確認されている。本文は以下のごとくである: $\underline{y\text{šr}}$, $\underline{wy\text{dmr}} / \underline{bknr}$, “sings and plays on the lyre.”⁴⁰ この \underline{dmr}^{II} が、上記の \underline{dmr}^I とは異なる意味をもつ語根であることは、それが用いられているコンテキストより明白である。即ち、 \underline{dmr}^{II} は、動詞 $\underline{\text{šr}}$ (* $\underline{\text{šyr}}$) “to sing” と対に表われており、楽器 \underline{knr} “lyre” と共に用いられているのである。従って、この語 \underline{dmr}^{II} は、明らかにヘブル語の * $\underline{z\text{āmīr}}$ 「歌」に対応するものである。

③ \underline{dmr} :

この語は、UT 51: VII: 39, 2001: rev. 8 の2ヶ所に表われるが、ゴードンはこれを “our defense” (UMC 73) と漸定的に訳出してはいるが、UT では単に “word-division?” (19. 678) と記しているだけである。Dahood (UHP 55) は、M. ポープに従って⁴¹ \underline{dmrn} のうちに Byblos の Philo によって言及されているところの Hadad-Baal の別名としての Demarous を認めようとす

る。最近、Caquot, *et al.* (*TO* 217) は、この語 *dmrn* をウガリト語 *dmr^I* “brave, héros” と同根であると説明し、これを “Vaillant” と訳している。もしこの解釈が正しいならば、*dmr* は、上述の音韻変化(1)の結果生じたものである (i.e. **dmr* > *dmr*) と考えられ、従ってウガリト語の *dmr^I* は、archaic な綴りであると説明しうる。

④ *zbr*:

ゴードン (*UT* 19.817) は、ウガリト語における hapax legomenon, *zbr* (52: 9) を、イラクのアラビア語、*zabbara* と比較し、“to prune” と訳しているが、まだ議論の余地のあるものとしている。Donner-Röllig (*KAI* II, 182) は、この語 *zbr* をゲゼル・カレンダー (I.6) の *zmr* と比べ、後者を “Schneiteln (der Reben)” と訳出しているが、他方 Albright (*ANET* 320) はこの *zmr* を “vine-tending” と訳すのである。後者の見解が、⁴² 上述のウガリト語 *dmr^I* を “to protect” という意味にとり、そしてそれをこの *zmr* と対比させるものであることは明らかである。しかしながら、**dmr^I* の意義はむしろ “strong” (それ故 “to protect”) であろうことはすでに論じたとうりである。ゲゼル・カレンダーの語 *zmr* は、むしろ、*KB*, 260 (cf. *HAL* 263) のヘブル語語根 *zmr^{II}*, “cut” に対応すると考えられる。ウガリト語 *zbr* も、そのコンテキストより判断して、この “to cut” という意義——神、Mot-wa-Šar を滅ぼす行為をシンボリカルに演出している⁴³——をもっているようである。最近、Lemaire が適切にも指摘しているように、⁴⁴ 語根 *zmr* がぶどう栽培と結びつけられる時、それは必ずしも “to prune” を意味しない。ゲゼル・カレンダーは、その内容から察してむしろ “vintage” ととるべきである。ぶどうの栽培の全課程にて、“to cut” (ハサミによって) する行為は、“pruning” の時だけではなく “vintage” の場合にもなされるからである。以上のことから、ウガリト語 *zbr*, ゲゼル・カレンダー及び旧約聖書の *zmr* (*Cant.* 2: 12),⁴⁵ 更にイラクのアラビア語 *zabbara* は互いに cognate であり、“to cut” という意義素を有する祖形 **zmr* を想定することができる結論したい。⁴⁶ すなわち、ゲゼル・カレンダーの *zmr* は、ウガリト語の *zbr* (<**zmr*) と cognate であって、*dmr^I* とは区別されるべきである。なお、セム語祖形 **zmr* (“to cut”) とウガリト語の *zbr* との関係は、

**zmr*->*zambr*->*zabbr*-

というプロセスとして説明される。最初の変化、**zmr*->*zambr*- は、ギリシ

ヤ語における、*ámrotos > ambrotos (英 ambrosia 「神の飲物」) のように、*«b-glide»* の現象である。⁴⁷ 同じ現象は、ヘブル語名のギリシャ語への音訳——例えば、Zambr(e)i (へ zimri—I Chr. 2: 6) や Ze(m)bran (へ zimrān—Gen 25: 2, I Chr. 1: 32) 等——や、バビロニアの名前 Zimbir⁴⁸ などのうちに見られる。ウガリト語における、*šamš- > šampš- > šapš (“the sun”) という変化も類似した音韻変化である。次に、zambr- > zabbr- の変化は、いわゆる「環境同化の作業原則」の例で、上述のイラクのアラビア語 zabbara も、正に同じ音韻変化のプロセスの結果生じた形態であるといえる。

以上4つのウガリト語語彙の分析によって、ヘブル語の語根 zmr に対応するものとして、セム語祖語 *dmr^I (“strong”), *dmr^{II} (“to play (music)”) 及び *zmr (“to cut”) の3つの語根を想定することが出来ると思う。以下に、これらの論述にもとづいて、旧約聖書の Ex. 15: 2 と II Sam. 23: 1 におけるヘブル語の語根 zmr の意味と用法とを究明したい。

עֹזי וזמרת יה

'zy wzmrt yh (Ex. 15: 2)

最初の語 'zy (= 'ozzi) は、'z 「力」という名詞に、代名詞接尾辞 (pronominal suffix) -i がついたもので、「私の力」と訳すことには何ら問題はない。所が次の wzmrt yh にて、何故 zmrty にこの接尾辞がついていないか——即ち、何故 zmrty でないのか——という問題を説明するのに早くから様々の提案がなされて来た。Gesenius-Kautsch は、これを説明して、「zmrāt は実さいは zmrāti “my song” を意図しており、次の yāh を吸収することを促がすよう予定されているのである」と言っている。そして zmrāt の語尾 -āt を、ほとんど詩にのみ表われているところの、fem. sg. の語尾ととるのである。⁴⁹ Talmon は、マソラ本文では一人称の接尾辞 -i が名詞 (zmrāt) から切断されて、“progressive haplography” によって神名 yh と融合したと説明する。⁵⁰ Cross-Freedman も、この haplography の可能性を認めるが、同時に、マソラ本文のほとんどの写本におけるように mater lectionis の yodh が表記されていないのであると考える。⁵¹ しかし、'zy の場合には明らかに yodh が表記されていることから、この後者の立場は余り説得的ではない。Good は最近、haplography として文字表記の観点から説明する従来の立場を否定し、Lehman に従って、zmrty yh の表記のうちに、ヘブル語子音の “am-

bivalence” (二重傾向)の反映を認めようとする。すなわち、一つの子音 (=y) が、その前と後の両方にかかっているために、*zmrt yh* が、*zimirāthíyyah* と発音されたのであると、音声面から説明するのである。⁵² このように、‘*zy wzmr*」の *zmrt* に付加されているはずの人称接尾辞が、文字表記上の特殊現象としてか、或いはヘブル語の音声的現象としてかのいずれかの観点から説明されて来たのである。しかしながら、第三のさらに有力な方法として、ウガリト文書の文体的特徴との比較が提案されよう。すなわち、*zimirāt* は、‘*zy*」にある一人称接尾辞の grapheme -y を共有しており、従ってこの接尾辞 -ī は、Dahood のいわゆる “double-duty”-suffix であると考えることが可能である。⁵³ 例えば、ウガリト・テキストの ‘*nt*: III: 27-28 で、*bgr nḥlty* “upon the mountain of my patrimony” と *bgb’ tliyt* “upon the hill of my dominion / victory”⁵⁴ との両句が並行法を構成しており、*nḥlty* の一人称接尾辞 -y [ya]⁵⁵ が “double-duty” として、*tliyt* にも意味上関連していると説明できる。最近出版されたテキスト 602: 6-7 においても、この “double-duty” の文体的特色をもつ人称接尾辞 -h [hu] 「彼の」を認めることができる：

rpi. mlk. ‘lm. b’z
[rpi. m]lk. ‘lm. bdmrh

de Moor は、これを

“of Rāpi’u, the Eternal King, under protection”
“[of Rāpi’u, the] Eternal King, under his guard”

と訳出している。⁵⁶ しかしながら、*bdmrh* の接尾辞 -h は “double-duty” であるので、それと並行関係にある *b’z* は “under his power” と訳すことが出来よう。更に、このテキストでは、‘*z* と *dmr* とは、ウガリト語とヘブル語に共通な、所謂 “Fixed-pairs of synonyms”⁵⁷ の一つであり、*dmr* が ‘*z*」 「力」という語と並行にあることは、上に考察したごとく、前者の意義を “strong” 又は “strength” ととるべきであるという立場を確認するものである。

次に、ヘブル語 *zmrt* (= *zimirāt*) の語意に関する伝統的立場が、ウガリト語の *dmr* との比較によって吟味されつつあるのに注目しよう。Ex. 15: 2 の *zmrt* は、従来 “song” (RSV), 「歌」(口語訳)とか「ほめ歌」(新改訳)とかに訳され、多くの学者たちによって支持されて来た。しかし 1955 年の Cross-Freedman による “my defence”⁵⁸ という訳語において、セム語の **dmr*^I が

zmrt のうちに認められた。そして、Cassuto, Dahood, Richardson, Parker 等によって受け入れられ、ヘブル語の zmrt が ①「守り手」あるいは ②「力・「守り」と訳されるようになった。それに反して、zmrt を **dmr*^{II} と関連させるところの従来の立場を支持する学者たちも少なくはなく、最新の註解書にて B. S. Childs は、ヘブル語 zimrāt (Ex. 15: 2) の意味が “remains problematic” であると結論するのを余儀なくされている。⁵⁹ 以下に、zmrt の解釈について詳論しよう。

Keil-Delitzsch は、⁶⁰ ヘブル語の動詞 zmr (ピエル形) “to play music” 又は “to sing with a musical instrument” を Ex. 15: 2 の zmrt の背後に認めているが、最近、Loewenstamm⁶¹ も zmrt とセム語 **dmr*^{II} “to play (music)” とを比較し、ウガリト語テキスト 602: 3-4 における語 *dmr* に注目している：

dyšr. w*dmr* / bknr. w*l*lb. btp. w*mš*ltm
 “Who sings and *plays* with lyre and . . .”

彼によると、ヘブル語の zimrāt は zimrāh “the praise of God in cultic music” と同義であり、主として祭儀の歌にて神に帰される “glory” を「意味する」(denote) ののである。しかしながら、ヘブル語の語根 zmr (= **dmr*^{II}) の派生語が「栄光」という意味を “connote” 又は “imply” することはあっても、“denote” すると考えることは早計である。しかも、Loewenstamm が「栄光」(zmrt) が神の「力」(z) を賛美するもので、⁶² セム語の *z と **dmr*^{II} とがヘブル語及びウガリト語に共通の “tradition of hymn writing”⁶³ に属する一対の語であると言う時、彼はウガリト・テキスト 602 のうちに二つの語根、*dmr*^I (ll. 7, 9 // 'z) “strength” と *dmr*^{II} (l. 3 // šr) “to play (music)” が存在している事実を見落しているようである。Good⁶⁴ は、上の Loewenstamm の “glory” (zmrt) という訳を支持し、更に、'zy wzmrt(y) の句を *hendiadys* ととり、“My singing about strength” と訳出している。しかしながら、ウガリト・テキスト 602 の l. 6-7 ('z // *dmrh*) 及び l. 9 ('zk. *dmrk* “your power, your strength”) に見られるように、'z と *dmr*^I とが synonymous pair であると考えべきで、従って、もし 'zy wzmrt が、Good が提唱し、Parker も提案するように、⁶⁵ *hendiadys* であると見なすことが出来るならば、'zy wzmrt はむしろ “My strong power” の如く訳するのがより自然であろう。

ヘブル語 zmrt のうちにセム語の語根 **dmr*^I を認める立場は、テキスト 602

が *Ugaritica V* (1968) にて発表されるはるか前より、Cross-Freedman 等によって、南アラビア語、サマリア・オストラコン、アモリ語人名等との関連において主張されていた。⁶⁶ この **dmr*^I を “protection, defence” と訳す立場は、Cross (1962) においても受けつがれ⁶⁷ ているが、最近、Cross (1973) はウガリト・テキスト 602: 6-7 における *dimri-hu* “his strength” (// ‘z “might”) にみられるように、“strength” ととっている。⁶⁸ この変化は、すでに考察したとおり、ウガリト語 *dmr*^I の意義素が “strong” であって、ヘブル語の語根 *šmr* (“to protect, to watch”) とは区別されるべきとの理解にもとづいているからであろう。ヘブル語 *zmrt* (Ex. 15: 2) と **dmr*^I とを対応させる学者たちのうちでも、Dahood と Richardson は、*zimir* を “sentinel”⁶⁹ 又は “guard”⁷⁰ と訳出している。しかしながら、ヘブル語 *zimir* に形態論上正しく対応する語は、**dimr(u)* であって **dāmir(u)* ではない。⁷¹ *zimir* は、分詞形(従って「～する者」ととるよりも、抽象名詞と考えるべきである。従って、他の学者たちは、ヘブル語の女性名詞 *zimir* を、“defence” (Cross-Freedman), “protection” (Parker)⁷², “guard” (de Moor) 等ととるか、又は “power / help” (Cassuto)⁷³, “strength” (Cross: 1973), “strong” (Gordon)⁷⁴, “Stärke” (Borger)⁷⁵ 等と訳すことによって、抽象名詞と解釈するのである。前者のグループのうち、de Moor の立場⁷⁶ はすでに述べたように、*dmr*^I をヘブル語 *šmr* “to watch” と対応させているゆえに、音韻論的な難点がある。語根 *dmr*^I の意義素が “strong” であることからして、後者のグループの訳語が最も適切であるといえよう。従って、ヘブル語 *zimir* は「強さ」と訳すのが最も良く、‘*zy wzmrt* は、「私の力、(そして)私の強さ」即ち「私の強き力」と訳出することが出来ると結論したい。

ヘブル語において語根 *zmrt* はほとんど大ていの場合、**dmr*^{II} に対応しており、**dmr*^I “strong” に対応するのは、Ex. 15: 2 の *zmrt* の場合にみられるくらいであるが、それは「海の歌」(Ex. 15) が、Craigie が言うように、⁷⁷ エジプトとカナンの両方の雰囲気表現している語と句とを “artistic” に——豊かな “literary device” に富んで——用いている非常に archaic な歌である事と関係がある。すなわち、‘*z wzmrt* という語句は、古い形態が旧約聖書のうちに保存されているという「慣用句的」(idiomatic) な表現であって、カナンの宗教用語から古い時代に inherit され、すでに “fossilized” されている表現法なのである。従って、この古い詩、Ex. 15 に、ヘブル語の archaic な語⁷⁸ *zmrt* (= **dmr*^I) を認めうるとしても決して不思議ではな

い。Parker⁷⁹ が、Ex. 15: 2 以外では、この **dmr*^I を Gen. 43: 11 にのみ認めようとするのは、適切な判断であると思われる。

しかしながら、*zmr*t (Ex. 15: 2) のうちに **dmr*^I を認める学者たちのうちで、Cross-Freedman, Dahood,⁸⁰ Cazellus,⁸¹ Richardson,⁸² Cross⁸³ 等は、II Sam. 23: 1 の *zmrwt* にも同じ語根 **dmr*^I を認めようとしている。⁸⁴ そして、*zmrwt ysr'l* を「イスラエルの守り(手)」又は「イスラエルの強き者」と訳している。それに反して、伝統的な立場は、*zmrwt* を ① “songs” (RSV), “psalms” (NEB), 「歌」(新改訳)か、② “psalmist” (RSV), 「歌びと」(口語訳・関根訳)かのいずれかに訳し、**dmr*^{II} と結びつけて理解するのである。以下に、II Sam. 23: 1 における語根 *zmr* の意味と用法とを、ヘブル語の *n'm* との関連にて究明しよう。

נעים זמרות ישראל
n'ym zmrwt ysr'l
 (II Sam. 23: 1)

II Sam. 23: 1 の *zəmīrôt* のうちに **dmr*^I を認めようとする学者は、この *zəmīrôt* を Ex. 15: 2 の *zīmrāt* と同一視する傾向にある。Dahood 及び Richardson は、*zəmīrôt* と *zīmrāt* を共に “sentinel” 又は “guardian” と訳すのであるが、すでに述べたように *zīmrāt* は **dmr*- と結びつきうるけれども、*zəmīrôt* は、形態論的には、**damīr* を祖形⁸⁵ とするヘブル語の *zāmīr* の女性形 (*zāmīrah* > *zəmīrah*) の複数であって、*zīmrāt* とは全く異なる形態であると言わねばならない。さらに **dmr*- は「守り手」(=**damīr*) というよりむしろ「力」又は「守り」という抽象名詞であり、他方 **damīr* は所謂 *qatīl*-type の名詞であると考えられる。従って、*zəmīrôt* を *zīmrāt*: 「力」と同一視するのは早計であると言えよう。次に *zəmīrôt* の語尾 -*ôt* に注目したい。Dahood⁸⁶ は、この -*ôt* を女性形・“absolute-singular” 形で、フェニキア語にみられる *at* > *ôt* という変化の結果生じた形であると考え。また、*zəmīrôt* を “guerrier” と訳す Cazellus⁸⁷ は、-*ôt* が女性・複数形語尾であると認めつつも、それを “true feminine” としてでなく、“un nom de fonction” と説明する。さらに、Richardson と Dahood は、⁸⁸ この語尾を「尊厳の複数形」(plural of intensity / majesty) ととり、神の epithet であると考える。他方、Cross は、⁸⁹ クムラン写本 (4 Q Sam^a) の *zmr*t *ysr'l* を根

抛に、zmrt を単数 (=“the Mighty One” (m. sg.)) ととり、マソラ本文での -ôṭ という語尾の解釈を直接的には回避している。しかしながら、クムラン写本の zmrt はいわゆる “defective writing” と考えるべきであろう。これらの解釈は、言うまでもなく zāmîrôt を、同じ節の「ヤコブの神」(lhy y'qb) と同義的に考えようとする立場にもとづいているが、何故 zāmîrôt が女性形でなければならないかは必ずしも明らかではない。Richardson⁹⁰ が、この節のパラレリズムの現象に着眼しているのは正しいけれども、いわゆる並行法が常に A-B // A'-B' のパターンに添った synonymous parallelism であるとは限らない。さらに、前一千年期の詩、II Sam. 23: 1ff. に、Ex. 15: 2 におけるごとく “archaic” form, zmr を見出さねばならない理由は強くはない。zāmîrôt は、上述のとうり最も単純に、zāmîr の女性・複数形であろう。その語尾 -ôṭ を特別扱いする前に、そして、zāmîrôt に *ḏmr^I を認める前に、*ḏmr^{II} を認める可能性が皆無であるかを吟味、検討してみる必要がある。

この zāmîrôt に *ḏmr^{II} を認める者たちは、① “psalmist”, “singer” 又は、② “songs”, “psalms” のいずれかの訳をあてる。前者の “psalmist” (RSV), 「歌びと」(口語訳), 「歌人」(関根訳) 等の立場のものたちは、その語(女性・複数形)の前の nā'im を男性・単数形の形容詞ととり、nā'im zāmîrôt yisra'el を “sweet psalmist of Israel” (RSV) のごとくに訳出するが、この訳が統語論的に困難であることは明白である。又、形態論的にも、ダビデを指すと考えられるこの語、zāmîrôt が何故、女性・複数形であるのかは明らかではないし、zāmîrôt (*ḏamîr-) を、分詞形 *ḏamîr と比較するのも難かしい。RSV の立場は、多くの学者によって無批判に受け入れられているけれども、代表的な註解書である ICC (1899)⁹¹ 及び NCB (1971)⁹² によって疑問が投げかけられている。次に、第二の “songs” (RSV, note), “psalms” (NEB), 「歌」(新改訳) 等と訳す可能性が早くから提唱され、受容されてきた。形態論的に qatîl-type⁹³ の名詞である zāmîr (*ḏamîr) が、「歌う者」というよりは「歌われるもの、即ち、歌」と訳されるべきであることは理解されよう。その訳語に関しては、Keil-Delitzsch⁹⁴ が “a song of praise in honour of God” と説明するのに対して、Kirkpatrick 以下⁹⁵ は、宗教的歌に限定することなく “song” 一般を指したと考える点を指摘しておこう。

しかしながら zāmîrôt を “songs” ととる学者のうちにも、a) この歌の “subject” 即ち「歌い手」としてのダビデを考えるものと、b) 歌の “object” 即ち「歌われる主題・対象」としてのダビデを考えるものが存在する。例え

ば、前者の立場に立つ最も最近の学者、Hertzberg⁹⁶ は、*nə'im zəmirôt yisrā'el* を “pleasing in respect of songs”, 即ち、“the sweet singer” であると説明する。同様のことは、既に S. R. Driver が Ewald を引用して説明している。⁹⁷ 彼によれば、*yisrā'el* はその前の二語、*nə'im zəmirôt* 全体にかかっており、後者は “the pleasant one of songs” 即ち、“the pleasant singer” である。確かに統語論的には、「コンストラクト+属格」として正しくとらえられているが、⁹⁸ 何故 “the pleasant singer” とならなければならないかは必ずしも明らかではない。ただし、S. R. Driver も Hertzberg も⁹⁹ 共に、*nə'im* をアラビア語の *nağama*, “to sing” と結びつけることを慎重に拒否し、*zəmirôt* を “songs” と訳しているのは正しい¹⁰⁰といえる。これに反して、“the pleasant one of songs” を「歌われる対象者」と考える立場が存在する。Kirkpatrick¹⁰¹ は、字義通りには “the pleasant one of Israel's songs” と訳しうる句は、実は、“the pleasant object of Israel's songs” を意味するもので、イスラエルの歌い手たちにとって “delight or favorite subject” であるダビデのことを言っていると考える。H. P. Smith も同様に “the Joy of the songs of Israel”¹⁰² と訳出しているし、RSV の note でも “the favorite of the songs of Israel” の可能性を認めている。最近、John Mauchline は、これらの訳を支持するためという名目で、*nə'im* を *man'im* と修正 (emendation) するにまで至っている。¹⁰³ しかしながら、*nə'im* が形容詞の名詞的用法であるとみるならば、このような読み換えは全く不用とならう。以上の諸議論より、*zəmirôt* が「歌 (pl)」と訳されるのが一番自然であることがわかるであろうけれども、もしこの訳にためらいがあるとするならば、それは、むしろ、*nə'im* の解釈、つまり *nə'im* の意味及びそれと *zəmirôt* との統語的關係の理解の困難さに依存しているからである。

ヘブル語の語根 *n'im* は、ウガリト語におけるごとく、¹⁰⁴ “good” という意義素をもっている。従って、*nə'im zəmirôt yisrā'el* は直訳すると、“the good (one) of the songs of Israel” となる。これが、統語論的に最も自然な説明であることは上述のとおりである。*zəmirôt* のうちに、Ex. 15:2 の *zimirät* の場合のように、**dmr*¹ を認めようとする学者たち、例えば、Cross-Freedman, Cazellus, Richardson¹⁰⁵ らは、*nə'im* を名詞と扱い、“the beloved” 又は “the favorite” と訳す。Cazellus は、¹⁰⁶ メソポタミヤやエジプトの王たちが “l'aimé de tel ou tel Dieu” であったことに注目するのである。すなわち、Naram-Sin が “the beloved of Sin” であり、Hammurapi が神

Šamaš の、又、エジプトのパロが Amon や Ptaḥ の、“the beloved”であったように、イスラエルの王ダビデも又、Yahweh の「最愛のもの」であった。従って、Cazellus は、nə'im zəmirôt yisrā'el を“la favori du guerrier d'Israël”と訳すことを試みている。Richardson も同様に、¹⁰⁷ギンスバーグの訳¹⁰⁸に従って、nə'im を、ウガリトの英雄や王たちの“epithet”として表われる n'im のように、“the beloved”と訳すのである。確かに、ウガリトでは、n'im (又は n'imn) は、Krt 王 (128: II: 20, *et al.*) や英雄 Aqht (2 Aqht: VI: 32, 45, *et al.*) の epithet として表われるし、¹⁰⁹イスラエルにても、サウロとヨナタンは、“beloved and lovely”¹¹⁰ (han-ne'ēhābim wəhan-nə'imim) と呼ばれていることは注目すべき点である。¹¹¹しかしながら、zəmirôt を *dmr^I と関連づけることには形態論的な難点があることは上述の通りである。

zəmirôt を *dmr^{II} と結びつける立場のうち、それを“psalmist”, “singer”と訳すものは、nə'im を形容詞と考える。他方 zəmirôt を“songs”と訳すものたちは、nə'im を名詞として扱い、“the pleasant one”を、歌の「歌手」又は「対象」と説明して来た。ここでもう一つの立場、即ち、nə'im そのものを単独で“sweet singer”と訳す立場について考察しなければならないであろう。これは、BDB に於て、¹¹²アラビア語の naḡama, “to sing, to speak in a low, gentle voice”にもとづいて、ヘブル語の語根 n'im^{II} と分類され、詩篇 81: 3 “sweetly-sounding lyre” (kinnôr nā'im) 及び、II Sam. 23: 1 “Israel's sweet singer of songs”に認められている。このアラビア語による説明は、de Boer¹¹³はじめ、Dhorme, de Vaux, Leimback, Centenaire 等¹¹⁴によって受け入れられ、更に最近の NEB (“singer”)においても採用されているようである。これと同じ方法によって G. R. Driver は、ウガリト語の n'im ('nt: I: 19) を、アラビア語の naḡama を根拠にして“singer”と訳出している。¹¹⁵しかしながら、この語 n'im の解釈に関して、Dahood は、D. R. Driver の立場を“badly misplaced”と断定し、それを否定している。¹¹⁶Cassuto も又、ウガリト語の“singer”という意味での n'im は、Gayin ではなく 'Ayin によって表記されている点を強調し、II Sam. 23: 1, Ps. 81: 3, 135: 3, 147: 1 にみられるヘブル語の語根 n'im をアラビア語の naḡama で説明することを拒否するのである。¹¹⁷

ここで、我々は、もう一度ウガリト語、ヘブル語、アラビア語の音韻対応の事実に注目しなければならない。(表 1)より:

表 3	Proto-Semitic	*ʿ	*ǵ	→	*n'm	*ngm	表 4
	アラビア語	ʿ	ǵ		n'm	ngm	
	ウガリト語	ʿ	ǵ		n'm	ngm	
	ヘブル語	ʿ	ʿ		n'm	n'm	

の対応が得られる。しかしながら、ここにも音韻対応法則を機械的に適用するだけでは不十分であることが強調されねばならない。即ち、“sympathetic but critical”な態度が要求される。(表3より) 明らかなことは、北西セム語に於ては、前一千年期にて¹¹⁸——少なくとも“later biblical period”では¹¹⁹——

音韻変化 *ǵ/>/ʿ/.....(3)

がすでに完成していたという事である。さらに、J. Barr の指摘するように、¹²⁰セム祖語の二つの音韻 (x, y) が一つに merge するならば、xab と yab の二つのパターンの語は homonymous になるであろう。従って、今の場合、*ngm と *n'm とは、ヘブル語にて n'm として表われているであろうことが推測される。しかしながら、ウガリト語においては、語根 ngm は未だ確認されていない。そのうえ、後述するように、ウガリト語の n'm は「意味上」アラビア語の naġama “to sing”に対応しているという事実がある。こうした事実を説明するのに次の三つの可能性を挙げることができよう。


[A] Ugarit 語の語彙として ngm という語が実際に存在しているのであるが、我々には未だ知られていないだけである。

[B] Ugarit 語では、音韻変化 *ǵ/>/ʿ/のプロセスが起こったことが他の語より考えられるので、*ngm > n'm と変化した。

[C] セム祖語では *n'm のみが存在しており、アラビア語の naġama は後からの“secondary development”である。

第一の可能性 [A] は、ウガリト語テキストに於ける n'm の用法に注目する時、ほとんど受け入れることが困難である。例えば、Ugaritica V のテキスト 5 (=UT 605) の ll. 2, 4, 6, 10 において、¹²¹n'm は、“a qualificative of some music instruments such as *tp* ('tambourine') and *lb* ('flute')”として用いられており、“being harmonious”¹²² という意味をもっている。また、テキスト RS 22. 225 では、n'm は Astour が指摘するように «voix melodieuse»¹²³ という意味で用いられている。更に、2 Aqht: VI: 32 にお

ける n'mn は、“chants (and) sings” (ybd. wyšr) する者に対する呼び名として現われており、いちばん最近の訳では、その語を“minstrel”と訳出しているのである。¹²³最後に、後に詳しく論じるように、'nt: I: 19 での n'm も又、“a good (voiced) one”即ち、“a singer who can sing harmoniously”¹²⁴を意味しているのである。従って、以上の用例より判断すれば、ウガリト語では語根 n'm そのものが「音楽的な」コンテクストにて用いられていることが明らかである。それゆえ、ウガリト語にて n'gm が存在していると考えられる理由はないと結論できるであろう。

第二の可能性 [B] については、少し詳しく論じる必要がある。それは、ウガリト語に於て、*/g/ > /f/ という音韻変化がすでに起っている例がいくつか存在するからである。例えば、ウガリト語の t'rrk (51: IV: 39) は 'wr を語根とする動詞の L-stem であると考えられるが、それは、ヘブル語の語根 'wr 及びアラビア語の語根 ġyr に対応する。¹²⁵又、ウガリト語の 'rb (52: 26, et al.) は、ヘブル語の 'rb 及びアラビア語の ġrb と対応している。このスペリング ('rb) がウガリト語にて確立されたものであることは、'rb と ġnb (52: 26) が同じ箇所に表われていることより明らかである。即ち、ウガリト語にて、/g/ と /f/ の二つの音韻 (phoneme) が認められているのである。しかしながら、ウガリト語の ġnb “grape” に対応するアラビア語が 'nb である——ヘブル語も 'nb——ことは、アラビア語 'nb がカナン語よりの借用語であること¹²⁶を示しているのであって、ウガリト語の grapheme  (ġ) が音韻 /g/ とともに /f/ をも表記し得たということではない。従って、上記三つのウガリト語 'wr, 'rb 及び ġnb は次の如く表で示すことが出来よう：

	セム祖語	*ġ(w/y)r	*ġrb	*ġnb
表 5	アラビア語	ġyr	ġrb	'nb
	ウガリト語	'wr	'rb	ġnb
	ヘブル語	'wr	'rb	'nb

ウガリト語の ġnb とヘブル語の 'nb との比較により、前一千年期の北西セム語に於ては、上述の音韻変化 (3) */g/ > /f/ がすでに完結していることがわかる。他方、ウガリト語の 'wr と 'rb より、この音韻変化が、ウガリト語自体に於てすでに起きている事が理解されるが、このプロセス */g/ > /f/ は、ウガリト語においては、Rainey が注意深く述べているように、“evidently condi-

tioned in some way by the presence of r”¹²⁷ 即ち、すでに考察したように、ウガリト語における */d/ の保存が、その音韻的環境に r を含む場合であるという限定条件があったごとく、ウガリト語における */ǧ/>/l/ のプロセスも、その音韻的環境に r が存在している時に起りうるようである。¹²⁷

しかしながら、その音韻的環境に r が存在しない語にも、*/ǧ/>/l/ の音韻変化を認めようとする立場が提唱されてきた。G. R. Driver によれば、ウガリト語の n'm 及び 'ny は、ヘブル語の n'm 及び 'ny, アラビア語の nǧm “to sing”¹²⁸ 及び ǧnn “to praise”¹²⁹ に対応するのである。de Moor も同様に、ウガリト語の 'ny はアラビア語の ǧny と対応し、“to sing” と訳すべきであると考えている。¹³⁰ このことは、早くから、BDB がヘブル語の語根 *ny をアラビア語の ǧnn と比較することによって、'nh^{IV} “to sing” として独立分類していることから知られる。これらの他に、de Moor は、同じ現象をウガリト語の 'mm, 'rb, b'r, p'r, 'mr にもあてはめ、n'm, 'dr, 'wr においてもその可能性を考慮している。¹³¹ 以上を表にまとめると：

セム祖語	*n'm	*'ny	*'mm	*ǧrb	*bǧr	*pǧr	?	?	*ǧ(w/y)r
アラビア語	n'm (nǧm)	'ny (ǧnn/y)	'mm (ǧmm?)	ǧrb	bǧr	fǧr	ǧmr?	ǧdr?	ǧyr
ウガリト語	n'm	'ny	'mm	'rb	b'r	p'r	'mr	'dr	'wr
ヘブル語	n'm	'ny	'mm	'rb	b'r	p'r			

これらのうち、ウガリト語 'rb, 'wr はすでに考察したように、祖語 *ǧrb と *ǧ(w/y)r に対応する。ウガリト語 p'r, “to give / proclaim (a name)”¹³² は、アラビア語 faǧara “to open the mouth” に対応しているのは、'rb, 'wr の場合と同じく、その音韻的環境に r が存在しているからで、従って、祖形 *pǧr を想定しうる。同様に、ウガリト語の b'r 場合も、r の存在の故 *bǧr を想定することは理論的には可能である。しかしながら、ゴードンは、この語 b'r の意味の規定に困難を臆え、“the phonetically possible cognates are semantically difficult, with the possible exception of b'r ‘to burn’ & b'ar ‘to wander through’.” と説明している。¹³³ 最近 Dietrich-Loretz-Sanmartín は、b'r^I “brennen, anzünden” と b'r^{II} “überlassen, verlassen, wegschaffen, verwüsten” とを分類し説明している。¹³⁴ de Moor は、この語を、ウガリト語 /l/=アラビア語 /ǧ/ の例として挙げ、アラビア語の bǧr に言及しているが、別の所で b'r の同族語 (cognate) を考慮する時、アラビア語の bǧr は引用し

てはいない。¹³⁵ しかしながら、ウガリト語 *b'r* を *b'r^I* と *b'r^{II}* の二語根に帰すことが出来ることから、少なくともその一つを **bgr* と結びつけることは許されるであろう。

次に、ウガリト語 *'mm* の場合を考察しよう。Aistleitner は、2 Aqht: I: 28 及び II: 17 における *'m* をアラビア語の *gym* “cloud” と結びつけ、それを “Weihrauch Wolke” (// qtr) と考える。¹³⁶ それに反して、ゴードンは、この語根を *'mm* ととり、ヘブル語、シリア語及びアラビア語における *'m(m)* “people” であると主張するのである。¹³⁷ 最近の新しい訳 (TO) では、*'m* を一応 “clan” ととり、ゴードンの立場を支持している。¹³⁸ コンテキストの明確な理解が得られないが、*'m* をアラビア語の *'mm* と比べる可能性は小さくはない。さらに、ウガリト語 *'mr* (UT 19.187a) は hapax legomenon であり、その意味が明確ではなく、*'dr* の方には、本文上の (textual) 難点もあって、de Moor の提案には十分な根拠があるとは言えない。

更に、ウガリト語 *n'm* は、ヘブル語 *n'm* と同じく、「音楽的に」“good” という意味で用いられている場合が認められるので、ウガリト語に **ngm* “to sing” という語根の存在を想定する必要はないことは既に述べた通りである。アラビア語自身に、語根 *n'm* が存在することから、ウガリト語 *n'm* は、アラビア語 *ngm* と対応する——音韻的に——と考えるよりも、*n'm* と比べられるべきで、従ってセム語祖形 **n'm* をウガリト語 *n'm* の背後に想定すべきであろう。同様に、ウガリト語 *'ny* は、ヘブル語と同様に、“to answer” という意義素を有すると考えられる。UT 52: 12 (*t'nyn*) における動詞 *'ny* は “responsive singing” を意味している。¹³⁹ しかしながら、この語 *'ny* は “responsive” であるということ、即ち、儀式における “antiphon”¹⁴⁰ の演出を意図しているのであって、単に、“to praise” (Driver) 又は “to sing” (de Moor) という意味をもっていると考えする必要はない。ウガリト語とヘブル語の *'ny* は、意味論的にはアラビア語の *'ny* “to mean” と相違しているけれども、音韻論的¹⁴¹ に関連がある。従ってアラビア語の *gny* “to sing” に対応させることによって、セム語祖形 **gny* を想定する必要はないのである。

以上の考察より、ウガリト語音韻 // がアラビア語の音韻 /g/ に対応する場合、すなわち、ウガリト語にて音韻変化 **/g/ > /r/* のプロセスが見られる場合には、**grb > 'rb*, **bgr > b'r*, **pgr > p'r* 及び **g(w/y)r > 'wr* のごとく、その音韻的環境に *r* が存在するという条件があるようである。逆に、この限定条件のともなわない語、即ち、ウガリト語の *n'm*, *'ny*, *'mm* 等は、それぞれアラビア語

の n'm, 'ny, 'mm と対応することから、それらの祖形として、*n'm, *'ny, *'mm を想定しうると言えるであろう。又、'mr と 'dr の場合は、情報の制約により決定的なことは何も言えない。従って、第二の可能性 [B]、即ち、*ngm > n'm という変化が起きたと想定することは、適切ではないと言わねばならない。

従って、第三の可能性 [C]、即ち、セム祖語では *n'm のみが存在しており、アラビア語の nağama は後代の“secondary development”の結果生まれた語であるという考え方が、最も有力である。上述のごとく、ウガリト語の語根 n'm の音韻的環境に r が存在していない故、*ngm > n'm の変化は考えられない。従って、これらのことを表にすれば：

		セム祖語	*n'm
表 7	ウガリト語		n'm
	ヘブル語		n'm
	アラビア語		n'm+ngm

すなわち、セム祖語 *n'm の意義素は「良い」で、非常に広いコンテキストにおいて用いられたと考えられる。そして、その一つの、しかも重要な意味が「音楽的に良い」¹⁴² という意味であったということが出来よう。ウガリト語の n'm の用法を調べてみると、¹⁴³ この語がヘブル語の n'm 以上に広いコンテキストにて表われているのを知ることが出来る。ヘブル語においては、語根 n'm よりも、^{143'} 語根 tb 「良い」の方が、一般的な意味での“good”——これは r' “bad” と対に表われる——として表われる率のはるかに多い。n'm はヘブル語にては、むしろ特定のコンテキスト、たとえば「音楽活動」とか「英雄たち」の epithet として、主として用いられているのである。すなわち、ヘブル語における n'm には、所謂「意味の縮小」¹⁴⁴ の現象がおき、n'm の意味と用法が特殊化 (specialize) される方向に進んだと言えるであろう。そして、tb がより広い意味での「良い」という意味を表わす語として用いられた為に、ヘブル語において n'm の語の意味が「孤立化」(isolation) したと説明できる。次に、アラビア語の ngm の場合は、丁度反対の方向からとらえなければならない。アラビア語の n'm の意味が「拡大」(extension)¹⁴⁵ し、非常に一般的な意味“good”を表わすようになったため、「音楽的に良い」という特殊な意味を伝えることが出来なくなった。そこで、n'm と音韻的に類似した ngm という

語根が、第二次的発展 (secondary development)^{145'} として導入され、「音楽的」な意味での “goodness” を表わす語となったと説明できるであろう。同様の現象が、アラビア語の ḡny にも認められよう。即ち、アラビア語の 'ny は、セム祖語 *ny に対応するが、その意味が「拡大」し、ウガリト語 'ny がもっていたような「音楽的」な “response” (i.e. “responsive singing”) という特殊な意味を表わしえなくなり、非常に一般的な意味 “to answer” > “to mean” を示すようになった。その結果、'ny と音韻的に類似した ḡny という語根が、二次的に導入され、「音楽的」な意味での「応答」、すなわち、“to praise” 又は “to sing” を表わす語として用いられるようになったのであろう。以上の考察より、セム祖語にては、*n'm のみが存在していたとする、第三の可能性 [C] が支持されると結論したい。

さて、II Sam. 23:1 における nə'im の問題にもどる前に、ウガリト・テキスト 'nt: I: 18-20 における n'm の意味と用法について詳しく論じる必要がある。まず、そのウガリト語本文を挙げると：

- 18) qm. ybd. wyšr
- 19) mšlrm. bd. n'm
- 20) yšr. ḡzr. ṭb. ql

次に、このテキストの代表的な訳を年代順に記すことにする。¹⁴⁶—

- Gordon (1949): “He arose to sing and chant / With cymbals in the hands of *the Good One* / The lad, good of voice, sang. . .”
- Cassuto (1951): “. . . cymbals in the hands of *musician*, the sweet-voiced hero sings.”
- Ginsberg (1955): “. . . The *musician* plays the cymbals. . .”
- Driver (1956): “. . . a *singer* arose (that) he might trill. . .”
- Aistleitner (1959): “. . . *Liebllich* sang der schönstimmige Kräftige. . .”
- Gaster (1961): “. . . sing a *pleasant chant* to the accompaniment. . .”
- Astour (1963): “. . . cymbales d'une main *agréable*. . .”
- Dahood (1968): “. . . The cymbals are in the hands of the sweet-voiced. . .”
- Dahood (1970): “. . . With cymbals in the hands of *the Pleasant One*, . . .”
- Lipiński (1970): “. . . *harmonieusement*, cymbales en mains. . .”

de Moor (1971): “. . . the cymbals were in the hands of the *minstrel*,
 . . .”

Tsumura (1973): “. . . *the good(-voiced) one* . . .”

Caquot, Sznycer et Herdner (1974): “Il s'est mis à improviser et à
 chanter, les cymbales sont aux mains de *No'am*, le héros à la belle
 voix chante”

Bernhardt (1975): “Es hub an zu spielen und zu singen,
 Die Zymbel in der Hand, *ein Anmutiger*.
 Es sang ein Jüngling mit schöner Stimme.”

Cassuto は早くから、*'nt*: I: 19 の *n'm* が、“an epithet of the singer”¹⁴⁷ であり、2 Aqht: VI: 32 の *n'nm* “the Good One” も同様に “the musician” のことをさすと主張していた。現在では、上にみるごとく、大多数の学者が、*n'm* を「歌い手」又は「音楽家」のことを言っているのであると認めている。Aistleitner, Gaster, Astour, Lipiński 以外は全て、*n'm* をこの音楽活動に参加するもの(人)と考えている。“*agréable*” (Astour) 及び “*harmonieuse-ment*” (Lipiński) は共に、楽器(シンバル)の奏者の行為に結びつけられており、“*Lieblich*” (Aistleitner) は「声の良い」(fb. ql) 歌い手の歌い方を描写している。又、Gaster の “a pleasant chant” も、音楽的コンテクストを意識しての訳出である。しかしながら、*n'm* を「人」を表わすと考える方が統語論的により優れていると思われる。この後者の有力な立場をとる者のうちにも、*n'm* を訳出するのに4つの相異なる方法がある：

① 「良き者」等に訳すもの——“*Good One*” (Gordon); “*Pleasant One*” (Dahood); “*ein Anmutiger*” (Bernhardt).

② 「良き声の者」等に訳すもの——“*the good(-voiced) one*” (Tsumura); “*the sweet-voiced*” (Dahood).

③ 「音楽家」等に訳すもの——“*musician*” (Cassuto) (Ginsberg); “*minstrel*” (de Moor); “*singer*” (Driver). 但し、Driver, de Moor は、アラビア語 *nağama* にもとづいて、このように訳出している。

④ 固有名詞ととるもの——Caquot, Sznycer et Herdner は、*n'm* を *No'am* と読み、“*le nom du ménestrel de Ba'al*”¹⁴⁸ であると説明している。彼らによれば、*n'm* は単なる «*chanteur*» ではなく、**nu'm*-¹⁴⁹ の固有名詞化である。Caquot, *et al.* は、ウガリトの歌い手 *No'am* を、II Sam. 23: 1 におけるダビデのタイトル *nā'im* と関連づけようとする。しかしながら、ウガリト語

no'am (*nu'm-) とヘブル語 nā'im (*na'im) とは、形態論上、同一視するのは困難である。

上のいずれの立場をとるにせよ、明らかな事実は、ウガリト語の語根 n'm は、「音楽」活動のコンテクストにおいて、「歌い手」又は「音楽家」——「音楽的に良い者」——という意味をもっている点である。

ここで、II Sam. 23: 1 の nā'im zəmīrôt yiśrā'el の釈義的問題にもどることにしよう。イスラエルにて、ダビデが種々の歌の作曲・作詞をし、楽器も作り (Amos 6: 5)、さらにエルサレムにおける祭儀的音楽活動の組織化の基礎をきづいた (I Chr. 15: 16, *et al.*) 者であるということは、旧約聖書中に一度ならずも言及されている。¹⁵⁰ 従って、II Sam. 23: 1 において、ダビデが nā'im であると言われていることは、上述のウガリト語語彙 n'm の研究成果にもとづいて考察するならば、ごく当然であるといえよう。形態論的には、nā'im は、nā'im のコンストラクト形で、① 形容詞 nā'im “good” の名詞化用法であるか、又は、② *qatil-type の名詞で役職を表わすもの¹⁵¹ であると考えることが出来る。前者の立場にたてば、nā'im zəmīrôt yiśrā'el は、“the good(-voiced one of Israel's songs)” となり、後者の立場では、*na'im は、nābi' 「預言者」、nāgīd 「指導者(?)」、pāqīd 「監督、つかさ」等とともに役職をあらわす語「音楽家」又は「歌い手」¹⁵² 等と訳しうる。前者は、上述の n'm ('nt: I: 19) に対する①と②の立場に対応し、後者は、③の立場に対応する。結論として、II Sam. 23: 1 nā'im zəmīrôt yiśrā'el は次の如く訳すことができる：

“the minstrel (i.e. good-voiced) of Israel's songs” または “Israel's minstrel of songs” 「イスラエルの歌の歌い手」

Ex. 15: 2 及び II Sam. 23: 1 における、ヘブル語の語根 zmr と n'm とに関する語彙論的問題を、ウガリト学の研究成果にもとづいて考察してきた。ウガリト語の研究が、ヘブル語語彙研究にとって、どのような貢献をなしているのか、その方法論とともに今後、更に究明していくべき課題である。

1976. 10. 29

Abbreviation List (略号表)

- ANET J. B. Pritchard, *Ancient Near Eastern Texts Relating to the Old Testament*. Second edition.
 AOAT *Alter Orient und Altes Testament*.

- APNM H. B. Huffmon, *Amorite Personal Names in the Mari-Texts: A Structural and Lexical Study*.
- BASOR *Bulletin of the American Schools of Oriental Research*.
- BDB F. Brown, S. R. Driver and C. A. Briggs, *Hebrew and English Lexicon of the Old Testament*.
- CBQ *Catholic Biblical Quarterly*.
- CMHE F. M. Cross, *Canaanite Myth and Hebrew Epic: Essays in the History of the Religion of Israel*, 1973.
- CML G. R. Driver, *Canaanite Myths and Legends*.
- CTA A. Herdner, *Corpus des tablettes en cunéiformes alphabétiques découvertes à Ras Shamra-Ugarit de 1929 à 1939*.
- GK Gesenius' *Hebrew Grammar*, ed. Kautzsch, 2nd English ed. by A. E. Cowley, 1910.
- HAL W. Baumgartner, *Hebräisches und aramäisches Lexikon zum Alten Testament*, 1967.
- HTR *Harvard Theological Review*.
- IDB George A. Buttrick, ed., *The Interpreter's Dictionary of the Bible*.
- JAOS *Journal of the American Oriental Society*.
- JBL *Journal of Biblical Literature*.
- JCS *Journal of Cuneiform Studies*.
- JNES *Journal of Near Eastern Studies*.
- KB L. Köhler-W. Baumgartner, *Lexicon in Veteris Testamenti Libros*, 1953.
- KAI H. Donner and W. Röllig, *Kanaanäische und aramäische Inschriften*.
- MKT J. Aistleitner, *Die mythologischen und kultischen Texte aus Ras Shamra*.
- NEB *New English Bible*.
- PRU *Le palais royal d'Ugarit*.
- PTU F. Gröndahl, *Die Personennamen der Texte aus Ugarit*.
- RHR *Revue de l'Histoire des Religions*.
- RSP Loren R. Fisher, ed., *Ras Shamra Parallels*.
- RSV *Revised Standard Version*.
- RTAT Walter Beyerlin, ed., *Religionsgeschichtliches Textbuch zum Alten Testament (Grundrisse zum Alten Testament Band I)*, 1975.
- SSL Pelio Fronzaroli, ed., *Studies on Semitic Lexicography. (Quaderni di Semitistica 2)*.
- TDOT G. J. Botterweck and H. Ringgren, eds., *Theological Dictionary of the Old Testament*.
- TO *Textes Ougaritiques: Tome 1: Mythes et Légendes*, 1974.
- UF *Ugarit Forschungen*.
- UHP M. Dahood, *Ugarit-Hebrew Philology*.
- UL C. H. Gordon, *Ugaritic Literature*, 1949.
- UMC C. H. Gordon, *Ugarit and Minoan Crete*.
- UT C. H. Gordon, *Ugaritic Textbook*.
- UTS C. H. Gordon, *Supplement to UT*.

VT	<i>Vetus Testamentum.</i>
VTS	<i>Supplements to VT.</i>
WUS	J. Aistleitner, <i>Wörterbuch der ugaritischen Sprache.</i> Third edition.

¹ 日本語によるウガリト学と旧約学とに関する参考文献として次のものが挙げられよう：—

サイラス・ゴールドン著(柴山 栄 訳)『聖書以前』みすず書房。1967。

C. H. ゴールドン著(高橋正男訳)『ウガリト文学と古代世界』日本基督教団出版局。1976。

サイラス・H・ゴードン著(津村俊夫訳)「古代オリエントに於けるウガリトの重要性」、『オリエント』第17巻(1974)、1-12頁。

関根正雄著「旧約聖書の地中海的背景」、『聖書学論集』3(1965)、153-179。

津村俊夫著「ウガリトと旧約聖書」、『福音主義神学』6(1975)、1-17。

² James Barr, *Comparative Philology and the Text of the Old Testament*, Oxford: Clarendon, 1968; Antoine Meillet, *The Comparative Method in Historical Linguistics*. Paris: Librairie Honoré Champion, 1966, 及び、服部四郎著「比較の方法」、『言語の系統と歴史』岩波書店、1971、1-22頁を参照。

³ William Foxwell Albright, *Yahweh and the Gods of Canaan*. New York: Doubleday, 1968, 及び Mitchell Dahood, "Ugaritic-Hebrew Parallel Paris", in Loren R. Fisher (ed.), *RSP I* (1972), p. 85.

⁴ Cyrus H. Gordon, *UT*, p. 144, 及び関根正雄著「セム語の系統」、『言語の系統と歴史』(前掲)、207頁を参照。

⁵ James Barr (前掲書), p. 94.

⁶ James Barr, "Hebrew Lexicography", in Pelio Fronzaroli (ed.), *SSL*, p. 105.

⁷ Johannes C. de Moor, "Ugaritic Lexicography," in Pelio Fronzaroli (ed.), *SSL*, pp. 66-71.

⁸ ウガリト語本文の解釈に関する学者間のくい違いは、次のギンスバーグの明言により理解できよう：“the only people who have never made mistakes in Ugaritic philology are those who have never engaged in it.” by H. L. Ginsberg, “Interpreting Ugaritic Texts”, *JAOS* 70 (1950), p. 156.

⁹ ウガリト語の文法に関しては、特に“open-mindedness”をもつ必要がある。ウガリト語に Aphel-causative の存在の是非をめぐる論争は好い例である。de Moor, in *SSL*, 96-97 によれば：“if we acknowledge the existence of rudimentary Shaphel-forms in Hebrew, there is no reason at all why we should deny the possibility of a limited number of Aphel-forms in Ugaritic.”

¹⁰ Gordon, *UT*, p. 30. Also cf. Sabatino Moscati, (ed.), *An Introduction to the Comparative Grammar of the Semitic Languages: Phonology and Morphology*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1969, p. 43f.

¹¹ アモリ語に於ける同じような現象について、H. Y. Priebatsch, “Š und T in Ugarit und das Amoritische,” *UF* 7 (1975), p. 393 は、次の如く述べている：“Die amoritischen Schreiber Mesopotamiens hatten das ursemitische \underline{d} meist durch z ausgedrückt, gelegentlich durch d (adkur).”

¹² Gordon, *UT*, p. 26f. (§ 5.3). 問題の語、dr’ “to sow” については、*UT*, § 5.4 を

参照。しかし、最新の情報によると、ウガリト語 *dr'* “seed” が確認されている。Cf. M. Dietrich, O. Loretz, and J. Sanmartín, “Der keilalphabetische *ŠUMMA. IZBU. text* RS 24. 247+265+268+328”, *UF* 7 (1975), p. 139.

¹³ *UT*, § 5.3 (p. 26).

¹⁴ Cf. A van Selms, “A Systematic Approach to CTA, 5, I, 1-8”, *UF* 7 (1975), p. 482.

¹⁵ これについては後述。

¹⁶ *Krt*: 36 におけるスベリング *dhrt* を根拠に、John Gray, *The KRT Text in the Literature of Ras Shamra* (Leiden: E. J. Brill, 1964), p. 35 のように *drt* の語根を *šar* (Syr.) “to be wakeful” 及び Arabic *sahira* “to pass a sleepless night” と関連させるのは、音韻論的に難かしいと、ゴードンが説明するのは正しい。*UT* § 19. 735 (p. 388)。

¹⁷ Priebsch, *UF* 7 (1975), p. 390, n. 3 参照。

¹⁸ これは *𐎠𐎢𐎣* *𐎠𐎢𐎣* に対応する。Cf. *UT* § 19. 719.

¹⁹ この *dd¹* を “encampment” (// *qrš*: “Loan from Akkadian *karašu* ‘camp’”) と訳出する立場が最近提案されている。Cf. Meindert Dijkstra-Johannes C. de Moor, “Problematical Passages in the Legend of Aqhātu”, *UF* 7 (1975), p. 192. それを “mountain” と訳すことに関しては後述。

²⁰ Frank Moor Cross, Jr., “Yahweh and the God of the Patriarchs”, *HTR* 55 (1962), p. 249.

²¹ *PRU* 6 (1970). Text 156: 3 (p. 119). Cf. Frank M. Cross and David N. Freedman, “The Name of Ashdod”, *BASOR* 175 (1964), 48-50.

²² A. F. Rainey, “Observations on Ugaritic Grammar”, *UF* 3 (1971), p. 172. Also (拙著) D. T. Tsumura, *The Ugaritic Drama of the Good Gods: A Philological Study*. Ann Arbor: University Microfilms, 1973, p. 124f. を参照。この Rainey の説明は、最近、Cross によっても採用されている: F. M. Cross, “𐎠𐎢𐎣 'el”, in G. Johannes Botterweck & Helmer Ringgren, ed. *Theological Dictionary of the Old Testament [TDOT]* Vol. I, Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans, 1974, p. 256f.

²³ このことは、ウガリト語アルファベットによる綴り、*ʾmtmr* 及び *ʾtr* が、それぞれ、アッカド語音節文字表記による *ʾam-mi-iš-ta-mar* (in Ugarit) と *ʾha-mi-iš-ta-mar* (in Mari) 及び *d¹astar* (in Ugarit) と *d¹išdar* (in Mari) に対応していることから支持される。Cf. Priebsch, *UF* 7 (1975), p. 391-392.

²⁴ *dd¹* をアッカド語 *šadû* “mountain” と同一視する Dahood, *UHP*, p. 56 は、*dd¹* を *šd* と同一ととるが、Cross, *HTR* 55, p. 245ff は、ウガリト語 *šd* “field” と *dd¹* (// *td¹*) とを区別している。Richard J. Clifford は、*dd¹* が *qrš* とパラレルである故、(intra-Ugaritic evidence を強調し) “tent” と訳出している: “The Tent of El and the Israelite Tent of Meeting”, *CBQ* 33 (1971), 222. また、ゴードンは、“territory”, “premises” と一時的に訳している (*UT*, § 19. 721)。

²⁵ Cross は、ヘブル語の *šadday* をウガリト語 *aršy* [*Aršay*], *ṭly* [*Ṭallay*], *pdry* [*Pidray*] と比べ、両者に共通の *-ay* (語尾) を認めようとする。そして、“a natural element plus an adjectival suffix” (神名形成の familiar pattern として) をそれらに認める。しかしながら、ウガリト語の *-ay* 語尾は、adjectival というよりも、むしろ、*rḥmy* (*Rahmay*) (52: 16)、アモリ語名 *Ra-aḥ-ma-ya* (*APNM*, p. 261)、及びヘブル語名 *Saray*

(=Sarah) 等にもみられるように、古い「女性形」の語尾であると考えられよう。さらに、ヘブル語 šadday の形態は、*šdd を語根と考える可能性をもっている故、ウガリト語 tdy // ¹ša-du-ia₀ との関連は必ずしも明確ではないといわねばならない。Cf. Cross, *TDOT*, p. 256f.

²⁶ Cross, *HTR* 55, p. 250.

²⁷ Dahood, *UHP*, p. 6-7, 56; also Ginsberg, *The Legend of King Keret* (注 27' をみよ), p. 49. なお, kšd // kqd の問題については, M. Dietrich-O. Loretz-J. Sanmartín, "Beiträge zur ugaritischen Textgeschichte (II)", *UF* 7 (1975), p. 538 を見よ。

^{27'} たとえば, tīr "flesh" と šīr "flesh" (RS 22. 225, l. 3) は, 前者が古いスペリングで, 後者が *tī/>/š/ の変化の後の綴りであると考えられる。しかし, いずれの綴りも語源的 *tīr/ を意味しているが, grapheme "t" (tīr における) は実質的には /t/ ではなく /š/ を表わしていると考えられよう。なお, šīr="flesh" に関しては, Gordon, *UT*, § 19. 2372 (p. 487), Caquot, *et al.*, *TO*, p. 505 を参照。*tīr については, šīr の場合と同じく, ヘブル語 šīr "flesh" と関連づける立場, e.g. M. Dietrich-O. Loretz, "Der Prolog des KRT-Epos (CTA 14 I 1-13)", in H. Gese and H. P. Rüger, ed., *Wort und Geschichte* (Karl Elliger Festschrift) (*AOAT* 18) 1973, p. 34; H. L. Ginsberg, *The Legend of King Keret*. New Haven: American School of Oriental Research, 1946, p. 33; Gray, *The KRT Text*, p. 32; Michael C. Astour, "Un texte d'Ugarit récemment découvert et ses rapports avec l'origine des cultes bachiques grecs", *RHR* 164 (1963), p. 6, n. 1 を参照。しかし, tīr を, šīr と区別して説明する者もある: Caquot, *et al.*, *TO*, p. 124, 505; Dahood, *UHP*, p. 73, etc.

²⁸ Cross, *HTR* 55, p. 250; also Rainey, *UF* 3, p. 157. 従って, 注 27 の Dietrich, *et al.*, *UF* 7, 538 に於けるように, kqd に対して kšd を "modernisierte Schreibung" であると考え, 両者を語源的に同根であるとするのは説得的ではない。我々の説明によるならば, kqd は, */kqd/ または */ktd/ を表記するもので, */kšd/ を意図しえない。即ち, "d" (grapheme) は一貫して "inter-dental fricative" —— 有声または無声音 —— を表わしたのであって, いわゆる "polyphonous" (/d/ と /š/) であるという事ではないのである。(拙著)津村俊夫著「ウガリト文書, *UT* 52, の解釈に関する方法論的諸問題」『オリエント』17 (1974), p. 53f. を参照。なお kqd を k+dd とする立場は, R. Borger, *UF* 1 (1969), p. 4 を見よ。

²⁹ Rainey, *UF* 3, p. 157,

³⁰ Cf. Gröndahl, *PTU*, p. 197, 14.

³¹ Dahood, *UHP*, p. 56.

^{31'} Gordon, *UT* § 19. 727, also *UTS*, p. 551; Huffmon, *APNM*, p. 188; Gröndahl, *PTU*, p. 197; F. M. Cross, Jr. and D. N. Freedman, *Studies in Ancient Yahwistic Poetry*. Missoula, Montana: Scholars Press, 1975, p. 55; etc.

³² M. Dijkstra-J. C. de Moor, *UF* 7, p. 175.

³³ de Moor, in *SSL*, p. 96; also J. C. de Moor, "Studies in the New Alphabetic Texts from Ras Shamra I", *UF*, 1 (1969), p. 179; 上掲の *UF* 7, p. 175f.

³⁴ 前掲の注 28 を見よ。

³⁵ Gordon は, ウガリト語テキスト (*UT*) 1047: side 1 の šmrm を, "possibly means 'guards' (Heb. šōmērīm) と説明している。

³⁶ 松田伊作著「古代文献語の意味考察——ヘブライ語一動詞群について——」。『現代

言語学』岩波書店、p. 300, note 6 参照。

³⁷ R. Borger, "Weitere ugaritologische Kleinigkeiten: IV. Zu Ugaritica V, Virolleaud NR. 2", *UF* 1 (1969), p. 4.

³⁸ *UT* 602: 6-7, 9.

³⁹ あるいは、〈強い〉及び〈守る〉という二つの意義素をもっている、即ち、「多義語」(polysemy)であると仮定できるかも知れない。但し、ここで「意義素」(sememe)とは、単一の「語彙素」によって担われる意味の基本的単位をいう。Cf. 池上嘉彦著『意味論』大修館、1975、139-143頁及び170頁以下。なお、服部四郎著「意味」。『言語』(岩波講座哲学)岩波書店、1971、283-338頁を参照。

⁴⁰ Gordon, *UTS*, § 19.727a (p. 551).

⁴¹ Marvin H. Pope, *El in the Ugaritic Texts (VTS 2)*, Leiden: E. J. Brill, 1955, p. 47, n. 95.

⁴² Also H. Neil Richardson, "The Last Words of David: Some Notes on II Samuel 23: 1-7", *JBL* 90 (1971), p. 261.

⁴³ Cf. David Toshio Tsumura, "A Ugaritic God, MT-W-ŠR, and his Two Weapons, (UT 52: 8-11)", *UF* 6 (1974), pp. 407-413.

⁴⁴ André Lemaire, "ZĀMĪR dans la tablette de Gezer et le Cantique des Cantiques", *VT* 25 (1975), p. 18f.

⁴⁵ しかし、この個所には、ヘブル語の *zmr* "to cut, to prune" と *zmr* "to sing" との二語を意図する Word-play の可能性が認められよう。

⁴⁶ Lemaire, *VT* 25, p. 20 は、*zāmīr* を "dialecte 'cananéen' parlé en Palestine avant l'arrivée des Israélites" と考え、ヘブル語に於ける *bāšīr* と *zāmīr* との違いを、"dialectal" と説明している。

⁴⁷ Cf. Leonard R. Palmer, *Descriptive and Comparative Linguistics: A Critical Introduction*. London: Faber & Faber, 1972, p. 63; Anthony Arlotto, *Introduction to Historical Linguistics*. Boston: Houghton Mifflin, 1972, p. 79.

⁴⁸ A. Falkenstein and W. von Soden, *Sumerische und akkadische Hymnen und Gebete*. Zürich: Artemis, 1953, p. 420.

⁴⁹ E.g. נָחַלְתִּי (Jer. 45: 25). Cf. GK, § 80g.

⁵⁰ S. Talmon, "A Case of Abbreviation Resulting in Double Readings", *VT* 2 (1952), p. 206f.

⁵¹ Frank M. Cross, Jr. and David N. Freedman, "The Song of Miriam", *JNES* 14 (1955), p. 243, no. b.

⁵² Edwin M. Good, "Exodus XV 2", *VT* 20 (1970), p. 359. Cf. I. O. Lehman, "A Forgotten Principle of Biblical Textual Tradition Reconsidered", *JNES* 26 (1967), p. 98.

⁵³ Mitchell Dahood, *Psalms III: 101-150 (The Anchor Bible)*. New York: Doubleday, 1970, p. 158.

⁵⁴ Mitchell Dahood and Tadeusz Penar, "The Grammar of the Psalter", in *Psalms III*, p. 452.

⁵⁵ *bār nḥlty* [ba-gûr naḥlatiya]. ここでは、属格 (naḥlati) のため -ya がついている。Cf. *UT*, § 6. 6.

⁵⁶ de Moor, *UF* 1, p. 176.

⁵⁷ Cf. Mitchell Dahood, "Ugaritic-Hebrew Parallel Pairs": Fisher, ed., *RSP I*, pp. 71-382 [609 pairs] and *RSP II* (1975), pp. 1-33, 34-39 [66+18 pairs]. 計 693-pairs.

⁵⁸ Cross and Freedman, *JNES* 14, p. 243.

⁵⁹ Brevard S. Childs, *The Book of Exodus: A Critical, Theological Commentary*. (Old Testament Library). Philadelphia: Westminster, 1974, p. 242.

⁶⁰ C. F. Keil and F. Delitzsch, *The Pentateuch II (Biblical Commentary on the Old Testament)*. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans, N. D., p. 51.

⁶¹ Samuel E. Loewenstamm, "The Lord is my Strength and my Glory", *VT* 19 (1969), p. 467f.

⁶² 彼は、その根拠として、Ex 15: 13, Ps. 21: 14, 63: 3, 66: 3, 77: 15 *et al.* を挙げる。

⁶³ Loewenstamm, *VT* 19, p. 466.

⁶⁴ Good, *VT* 20, p. 359. 彼は hendiadys の別の例として、'zy wmgny ("my strong shield") [Ps. 28: 7] を挙げる。

⁶⁵ Simon B. Parker, "Exodus XV 2 Again" *VT* 21 (1971), p. 373f. Parker は 'zy wzmrt が、次の句の yšw'h と並行にあるのに着眼し、これを «a synonymous pair // a further synonym» というパターンを形成している文体であると言う。—also in Gen 3: 18, Is. 60: 18, Job 3: 15, 30:19. そして、'zy wzmrt が "hendiadys" であるとすれば、それは "strong protection" または "protective strength" の如く訳しようと考える。ウガリト・テキスト 602: 9-10 についての彼の立場は、Simon B. Parker, "The Feast of Rāpi'u" *UF* 2 (1970), pp. 243-249 にて知ることが出来る。

⁶⁶ Cross and Freedman, *JNES* 14, p. 243, 他。注 31' を見よ。E.g. b'lyzmr (Samaria Ostrakon 12: 2-3); zi-im-ri-^dIM, zi-im-ri-^dDa-gan, zi-im-ri-^diš-tar (Mari); qmrhd, qmrbl' (Ugarit) 等の人名。

⁶⁷ Cross, *HTR* 55, p. 249, no. 112.

⁶⁸ Frank Moor Cross, *CMHE* (1973), p. 21f.

⁶⁹ Dahood, *Psalms III*, p. 158, 154.

⁷⁰ Richardson, *JBL* 90, p. 261.

⁷¹ de Moor, *UF* 1, p. 179. 但し彼は、qmr^l=Heb. šmr "to protect" とすることは上述の通り。

⁷² Parker, *VT* 21, p. 373f. Also, *RSP I*, p. 291; Huffmon, *APNM*, p. 187f.

⁷³ U. Cassuto, *A Commentary on the Book of Exodus*, Jerusalem: Magness, 1967, p. 174.

⁷⁴ Gordon, *UTS*, p. 551.

⁷⁵ Borger, *UF* 1, p. 4. Cf. Gröndahl, *PTU*, p. 197 は "Schutz, Stärke" とする。

⁷⁶ 上記、注 33 及び 71 を見よ。

⁷⁷ P. C. Craigie, "An Egyptian Expression in the Song of the Sea (Exodus XV 4)", *VT* 20 (1970), p. 83-86.

⁷⁸ 但し、šmr の "archaic" な語形ではないことは既に述べた。なお、Ex 15 の「海の歌」の言語の古さに関する論述は次を参照のこと： Cross, *CMHE*, p. 121 (note 31, 32). David A. Robertson, *Linguistic Evidence in Dating Early Hebrew Poetry*, Missoula: Society of Biblical Literature, 1972 [A review article by Nahum M. Sarna in *JBL*

95 (1976), p. 126-129 参照]。

⁷⁹ Parker, *VT* 21, p. 374.

⁸⁰ Dahood, *Psalms III*, p. 116; *II* (1968), p. 121.

⁸¹ Henri Cazelles, "La titulature du roi David", *Andre Robert Festschrift*. Paris: Bloud and Gay, *N.D.*, p. 136.

⁸² Richardson, *JBL* 90, p. 259.

⁸³ Cross, *CMHE*, p. 235f.

⁸⁴ Richardson, *JBL* 90, p. 261 は、同じ語根を Ex 15: 2, II Sam 23: 1 及びゲゼル・カレンダーの zmr に認めようとする(上述)。

⁸⁵ Cf. זָמַר (Isa. 25: 5); זָמַרְוֹת (Job 35: 10; also Ps. 95: 2, 119: 54); זָמַרְתָּ (Isa. 24: 16).

⁸⁶ Dahood and Penar, *Psalms III*, p. 379.

⁸⁷ Cazellus, *A. Robert Festschrift*, p. 135.

⁸⁸ Richardson, *JBL* 90, p. 261f.; Dahood, *Psalms III*, p. 116.

⁸⁹ Cross, *CMHE*, p. 234, note 67.

⁹⁰ Richardson, *JBL* 90, p. 261f.

⁹¹ Henry Preserved Smith, *The Books of Samuel (The International Critical Commentary)*. New York: Charles Scribner's Sons, 1899, p. 382.

⁹² John Mauchline, *1 and 2 Samuel (New Century Bible)*. London: Marshall, Morgan and Scott, 1971, p. 312,

⁹³ E.g. 'āsīr "prisoner"; māšī*ḥ "the anointed one" (注 151 をも参照)。

⁹⁴ C. F. Keil and F. Delitzsch, *The Books of Samuel (Biblical Commentary on the Old Testament)*. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans, *N.D.*, p. 486.

⁹⁵ A. F. Kirkpatrick, *The Second Book of Samuel (The Cambridge Bible for Schools and Colleges)*. Revised ed. Cambridge: University Press, 1930, p. 434.

⁹⁶ Hans Wilhelm Hertzberg, *I and II Samuel: A Commentary (Old Testament Library)*. Philadelphia: Westminster Press, 1964, p. 400.

⁹⁷ S. R. Driver, *Notes on the Hebrew Text and the Topography of the Books of Samuel*. Second edition. Oxford: Clarendon, 1913, p. 357.

⁹⁸ S. R. Driver は König を引用して、この方法が "grammatically, a perfectly legitimate rendering" であると言っている(同上)。

⁹⁹ Driver (同上); Hertzberg (p. 400).

¹⁰⁰ 証しい議論は後述。

¹⁰¹ Kirkpatrick, *The Second Book of Samuel*, p. 434.

¹⁰² H. P. Smith, *The Books of Samuel*, p. 381.

¹⁰³ J. Mauchline, *1 and 2 Samuel*, p. 312.

¹⁰⁴ *UT*, § 19. 1665 (p. 445). 語根 n'm の意味の広がりに関しては後述。

¹⁰⁵ Richardson, *JBL* 90, p. 259; Cazellus, *A. Robert Festschrift*, p. 136.

¹⁰⁶ Cazellus (同上), p. 135.

¹⁰⁷ Richardson, *JBL* 90, p. 261.

¹⁰⁸ H. L. Ginsberg, "Ugaritic Myths, Epics, and Legends", in James B. Pritchard, ed., *ANET*, p. 143. Also, Ginsberg, *The Legend of King Keret*, p. 35-36 on Krt: 40.

¹⁰⁹ Caquot, *et al.*, *TO*, p. 484f.; also p. 438, no. 11.

¹¹⁰ Cf. W. L. Holladay, *VT* 20, (1970), p. 178f.

¹¹¹ D. T. Tsumura, *The Ugaritic Drama of the Good Gods*, p. 20.

¹¹² *BDB*, p. 654.

¹¹³ P. A. H. de Boer, "Texte et traduction des paroles attribuées à David en 2 Samuel xxiii 1-7", *Volume du Congrès (VTS 4)*, Leiden: E. J. Brill, 1957, p. 49.

¹¹⁴ Cited by H. Cazelles.

¹¹⁵ G. R. Driver, *CML*, p. 156, no. 14 (但し、15は14のミスプリント)。

¹¹⁶ Dahood, *Psalms II*, p. 263f.

¹¹⁷ U. Cassuto, *The Goddess Anath: Canaanite Epics of the Patriarchal Age: Texts, Hebrew Translation, Commentary and Introduction*. Trans. Israel Abrahams. Jerusalem: Magnes Press, 1971, 1951, p. 111.

¹¹⁸ Moscati, ed., *An Introduction to the Comparative Grammar of the Semitic Languages*, p. 40.

¹¹⁹ Barr, *Comparative Philology and the Text of the Old Testament*, p. 129.

¹²⁰ 同上, p. 127.

¹²¹ Charles Virolleaud, "Les nouveaux textes mythologiques et liturgiques de Ras Shamra", *Ugaritica V* (1968), p. 561.

¹²² D. T. Tsumura, *The Ugaritic Drama of the Good Gods*, p. 20; also p. 177f. on "musical instruments".

¹²³ Astour, *RHR*, 164, p. 6.

¹²⁴ Dijkstra-de Moor, *UF* 7 (1975), p. 187f. Also see D. T. Tsumura, *The Ugaritic Drama of the Good Gods*, p. 190, p. 216 (no. 93).

¹²⁵ Tsumura, 同上, p. 21. 更に、*UT* 52: 2, 22 に於て、「良き神々」(ilm. n'mm) が、常に「歌い手たち」(bn šrm) の表われる場面で "invoke" されている点は、n'm の意味と用法を理解する上で、非常に興味深い。なお、bn. šrm の解釈については、拙著『オリエン』17, 49-58 頁を参照。

¹²⁵ Cf. *BDB*, p. 734 はヘブル語の 'ōrēr をアラビア語 ḡyr と対応させる。ウガリト語の t'rrk については、Rainey, *UF* 3, p. 157 を見よ。

¹²⁶ Tsumura, *The Ugaritic Drama of the Good Gods*, p. 58. 音韻が */ǧ/>/l/ と変化することは認められるが、その逆は不可能である。従って、これらの語の祖形として *ǧnb を想定しうる。アラビア語が 'nb であることは、北西セム語にて音韻変化 */ǧ/>/l/ が完了していた時代——少くとも前一千年期以後——に、アラビア語の語彙の中に借入れられたと考えることを可能にする。この説明は、アラビア語の文化的・歴史的・社会的背景と矛盾するものではないということを描いておこう。

¹²⁷ Rainey, *UF* 3, p. 157.

¹²⁷ Gordon, *UT* § 5.32 (p. 33; also p. 26) は、"an unusual text UT 1045" にて、voiced ḡ が、unvoiced h の代りに表われていることに注目している: e.g. 人名 'bdyrḡ (1045: 2), ḡyrn (: 3), šḡr (: 13)——これらは通常、'bdyrḡ, byrn, šḡr と綴られている。上の場合は、その音韻的環境に r が存在する故に、ある方言における音韻変化 */b/>/ḡ/ が起っているであろう。

¹²⁸ G. R. Driver, *CML*, p. 156.

¹²⁹ G. R. Driver, *CML*, p. 141, no. 23.

¹³⁰ de Moor, *UF* 1, p. 224, no. 2; also Dijkstra-de Moor, *UF* 7 (1975), p. 189, no.

161. しかし、1975 では、“If there existed an Ugaritic verb 'ny^{II} 'to sing'” と、注意深く説明している。

¹³¹ Johannes C. de Moor, *The Seasonal Pattern in the Ugaritic Myth of Ba'lu* (AOAT 16), 1971, p. 93f.

¹³² Gordon, *UT* §19. 2078 (p. 469).

¹³³ Gordon, *UT* §19. 495 (p. 375).

¹³⁴ M. Dietrich-O. Loretz-J. Sanmartín, “Die keilalphabetischen Belege für B'R I und B'R II”, *UF* 7 (1975), p. 554-556.

¹³⁵ de Moor, *AOAT* 16, p. 109.

¹³⁶ Aistleitner, *WUS*, p. 234.

¹³⁷ Gordon, *UT* §19. 1864 (p. 457).

¹³⁸ Caquot, *et al.*, *TO*, p. 421.

¹³⁹ Tsumura, *The Ugaritic Drama of the Good Gods*, p. 39. Cf. לַעֲנוּת (Ps. 88: 1).

¹⁴⁰ Francis I. Andersen, “A Lexicographical Note on Exodus XXXII, 18”, *VT* 16 (1966), p. 108-112. Also see Baruch Levine, “Ugaritic Descriptive Rituals”, *JCS* 17 (1963), p. 106. Cf. *IDB*, III, p. 459.

¹⁴¹ Gordon, *UT* §19. 1883 (p. 458).

¹⁴² Gen 4: 22 における、トバル・カインの妹のナアマ (na^amäh) には、この意味での語根が含まれていると考えられるかも知れない。

¹⁴³ Tsumura, *The Ugaritic Drama of the Good Gods*, p. 187-192, on “Concept of ‘Good’”.

¹⁴³ Gordon, *UT* §19. 1665 (p. 445) によれば:—“Only in Ugaritic and Phoenician is 𐎎𐎍 the normal word for ‘good’”. なお、語根 *n'm が西セム語においてアッカド語 *damqu* “good” に意味上対応するものであろうことは、シュメール語 SIG₅ <𒀭𒀪> (=damqu [アッカド語]) が、ウガリトの人名、na'am (SIG₆)rašap (^dGIR. UNU. GAL) // nu-ma-re-ša-ip 及び地名 ^{uru}ia-ku-SIG₆ // ^{uru}ia-ku-na-mi // ykn'm (=ykn+n'm) を表記するために使用されていることから知られよう。Cf. Gröndahl, *PTU*, p. 163; also Dennis F. Kinlaw, *A Study of the Personal Names in the Akkadian Texts from Ugarit*, University Microfilm, 1967, p. 397, 306.

¹⁴⁴ S. ウルマン著(池上嘉彦訳)『言語と意味』大修館、1969、261頁。Also, Arlotto, *Introduction to Historical Linguistics*, Chapter 11.

¹⁴⁵ S. ウルマン著『言語と意味』262頁。

¹⁴⁵ Moscati, *op. cit.*, p. 39 は、アラビア語の音韻 /ǧ/ が pharyngal /ʕ/ より派生——二次的に——する可能性があることを述べている。たとえば、*musawwa*' > *musawwas*ǧ “permitted..”

¹⁴⁶ Gordon, *UL* (1949), p. 17; also *UMC* (1966), p. 50.

Cassuto, *The Goddess Anath*, p. 85.

Ginsberg, *ANET*, p. 136.

Driver, *CML*, p. 156, 83.

Aistleitner, *MKT*, p. 25.

Theodor H. Gaster, *Thespis: Ritual, Myth and Drama in the Ancient Near East*. Second edition. New York: Harper and Row, 1961, p. 235.

Astour, *RHR*, 164, p. 6, no. 3.

Dahood, *Psalms II*, p. 263f.

Dahood, *Psalms III*, p. 251.

E. Lipiński, "Banquet en l'honneur de Baal: CTA 3 (V AB), A, 4-22", *UF* 2 (1970), p. 77.

de Moor, *AOAT* 16, p. 67.

Tsumura, *The Ugaritic Drama of the Good Gods*, p. 21.

Caquot, *et al.*, *TO*, p. 155f.

Karl-Heinz Bernhardt, "Ugaritische Texte", in Walter Beyerlin (ed.), *RTAT* (1975), p. 212.

¹⁴⁷ Cassuto, *The Goddess Anath*, p. 111.

¹⁴⁸ Caquot, *et al.*, *TO*, p. 156, no. s.

¹⁴⁹ Cf. ウガリトの音節文字(アッカド語)表記による人名、*I nu-ma-re-ša-ip*, *I nu-ú-ma-ya* etc. これは、所謂 *qutl*-type の名詞(抽象)で、Gröndahl, *PTU*, p. 69 は:—*nu'm-* "Güte", *amor. nuḫm-*, *hebr. no'am* "Freundlichkeit"—と説明する。*TO*, p. 438, no. u では、*n'mn* を *nu'mān* と発音(vocalize)している。

¹⁵⁰ Keil and Delitzsch, *The Books of Samuel*, p. 486. なお、ウガリトに於ける「歌い手」「楽器」等の音楽活動については、拙著、*The Ugaritic Drama of the Good Gods*, pp. 172-181 on "Drama", "Singers", "Singing in poetic texts", "Musical instruments" and "Invocation" を参照。

¹⁵¹ Cf. GK, § 84a, l. (p. 231) (also p. 265); Hans Bauer-Pontus Leander, *Historische Grammatik der hebräischen Sprache des Alten Testaments*, Hildesheim: Georg Olms, 1962, 1922, p. 470-471; also cf. Jerzy Kuryłowicz, *Studies in Semitic Grammar and Metrics*, London: Curzon, 1973, p. 102, 112, 114, *et al.*

¹⁵² "singer" は、単に「歌い手」という意味ではなく、「楽器を使う歌い手」(I Chr. 15: 16 新改訳)をも含んでいる。